

# 逆接と大過去

Inversion et plus-que-parfait

岸 彩子

KISHI Ayako

# 逆接と大過去<sup>※</sup>

## Inversion et plus-que-parfait

岸 彩子

KISHI Ayako

Résumé : Dans le discours, le plus-que-parfait montre une certaine affinité avec l'inversion argumentative ou avec la négation, comme on le constate dans l'exemple voit ci-dessous.

« J'ai réussi *parce que* {*j'ai travaillé.* / *?j'avais travaillé.*} ».

« J'ai réussi *pourtant je n'avais pas bien travaillé.* »

Que montre cette différence entre le passé composé et le plus-que-parfait ?

D'autre part, pour traduire en japonais un plus-que-parfait de discours, on ajoute souvent *-noni* ou *-kuseni* « malgré », qui exprime l'inversion, et qui n'existe pas dans la version originale. D'où vient cette signification ?

Nous formulons l'hypothèse que le plus-que-parfait ne forme jamais une phrase événementielle. Cela vient de l'idée suivante ; le plus-que-parfait demande toujours de prendre en considération deux points temporels : le point de référence ( $t_1$ ) et le moment où se situe le procès exprimé par le participe passé ( $t_2$ ). C'est par cet ancrage temporel que se différencie le plus-que-parfait du passé simple ou du passé composé, qui, lui, exprime un procès comme événement.

Quant au plus-que-parfait, mis sous le thème qui se forme par  $t_1$ , il montre le procès qu'il décrit, non pas comme un événement, mais comme une propriété concernant  $t_1$ . Ainsi, dans un discours, utiliser le plus-que-parfait, qui marque une propriété du  $t_1$ , évoquera la comparaison avec la situation actuelle de  $t_0$ .

---

※本稿は日本学術振興会科学研究費（基盤研究(B)課題番号18H00677）の補助を受けた研究成果の一部である。

Mot-clé : plus-que-parfait, inversion, négation, discours/récit, perception/savoir.

大過去、逆接、否定、知覚／知識、ディスクールの大過去

## 1. はじめに

大過去は語りの文脈で用いられることが多いが、例1、2のように発話現在時 $t_0$ との関連の中で用いられることもある。Benveniste (1974) のrécit (histoire) / discoursの対立を踏まえ、本稿では「ディスクールの大過去」と呼ぶことにする。

1) Je t'avais bien dit !

「だから言ったのに！」

2) Tu m'avais promis...

「約束したくせに…」

次の例文3-5は、いずれも談話内にも語りの文脈にも出現し得る。ディスクールの大過去でもrécitの大過去でもあり得るものである。

3) J'ai réussi parce que {j'ai travaillé. / ? j'avais travaillé.}

「{よく勉強したから/よく勉強していたから}、合格した。」

4) J'ai réussi pourtant {je n'avais pas travaillé. / ? je n'ai pas travaillé.}

「{よく勉強していなかったにもかかわらず/よく勉強しなかったにもかかわらず}合格した。」

5) Elle a annulé la réservation que son ami avait faite pour elle.

「彼女は、恋人がせっかくしていたのに予約をキャンセルしてしまった。」

例3、4に見るように、大過去は、否定、逆接の接続詞pourtant、maisなどと共起することが多く、順接の接続詞(例3のparce que)や、肯定文と組み合わせられると、大過去の容認度は下がり、複合過去が適切となる。これは何に起因するのか。

また、例1、2に見るように、ディスクールの大過去を訳す場合には、フランス語の形態には対応する要素がない「～のに」が補われることが多いが、これはどこから来るものなのか。

本稿では、時間限定の有無という観点から、大過去の性質を考察する。この対立は、話者がどのような立場から発話しているのかという観点からは、知覚を表す文であるか／知識を表す文であるかという対立に重なる。大過去は、あらかじめ設定され共有された大主題 $t_1$ の下に置かれることで時間的限定から外されており、 $t_1$ に関する知識を表すものである。

本稿では、ディスクールの大過去に見られる、逆接および否定との親和性は、大過去の基本的な性質に起因すると考える。その性質とは、大過去が、動詞の表す事態を、事態の知覚ではなく、事態の生起時点 $t_2$ とは異なる基準時点 $t_1$ での残存状態として表すものであること、また、大過去が基準時点 $t_1$ が話者－聞き手間で高度に共有されていることを要求することである。

ディスクールの大過去は、2つの状況situationを比較し、彼我の差を表すが、これは、物語の前景となる事態を表さず、後景に置かれ背景状況、背景知識となる事態を表すrécitの大過去と共通の、事態の生起ではなく、事態の結果状態を表すという性質から出来るものである。

ディスクールの大過去の振る舞いと、それに関する大過去の性質について、本稿では以下のことを主張する。

大過去の本質的な性質は、以下の2点である。

- 1) 未完了相である
- 2) 基準時 $t_1$ を強く志向し、 $t_1$ と事態（生起時点は $t_2$ ）を関連付けて述べる形である。

性質1) から、時間を進めないこと、生起時点が重要となる出来事を表さず、状態を表す線過去であることが導き出される。

性質2) からは、 $t_1$ および生起時点 $t_2$ を包括するテーマを戴き、その下にあるものとして事態を述べる形であるということができる。

récitの大過去が背景情報を表すのは、 $t_1$ について何事かを述べる形、すなわち $t_1$ を主題としてその下に事態を置く形であることによるものである。

ディスクールの大過去では、大過去が $t_1$ について何事かをいう形であることで、関与する3時点（事態の生起時 $t_2$ 、話者－聞き手が物理的に存在する発話現在時 $t_0$ 、および基準時 $t_1$ ）のうち言語化されない $t_1$ が話者－聞き手間で高度に共有され、「転換点」として強く意識されることになる。

## 2. 先行研究とその問題

### 2.1 南館・石野（1994）

次の例では、下線部の動詞は大過去、複合過去のどちらの時制にも置かれ得る。

- 6) J'ai rendu à Elsa le parapluie que je lui {ai emprunté. /avais emprunté.}  
「私はエルザに借りていた傘を返した」

だが、2つの異なる形態が、まったく同じ意味を伝達することはあり得ない。では、この場合、大過去と複合過去が伝達する意味は、どの点で異なるのか。

大過去と複合過去のどちらもが可能に思える例について、南館・石野（1994）では、「大過去に置いた場合、その行為が意図的に行われたような印象を与えやすい」と指摘している。

- 7) Elle a annulé la réservation que son ami avait faite pour elle.  
「彼女はせっかく恋人がとってくれていたのに予約をキャンセルしてしまった」

次の例では、laisserは「(うっかり) 忘れた」という意味で故意ではないので、大過去が不適切であり、複合過去が適切である。南館・石野の予測通りの結果になる。

- 8) Pouvez-vous me dire si on a retrouvé la serviette que j'ai laissée ce matin sur le  
filet de train ?  
「今朝、列車の網棚に置き忘れたカバンが見つかったかどうか、教えてもらえますか？」

この見方は、一見、例1、2に生じる「～のに」「～くせに」という逆接の意味を説明することができるように見える。大過去に置いたことで、この印象が起きるのであれば、形態そのものが伝達する意味の中に「わざわざ(言った)(約束した)」という意図性が含まれるということになるからである。

だが、この見方は、例3、4では事実と異なる予測をしてしまう。例3では「勉強する意図があった」という意味が出てくるはずの大過去が用いられるはずだが、実際は容認度が下がる。複合過去は、意図がないことを表しこの文脈では不適格になるはずだが、実際には問題なく用いられる。また「よく勉強した」もその否定「よく勉強しなかった」も主語jeの意図の有無に差はな

く、意図性を基準にすれば、大過去の容認度に差はないはずであるが、実際には、否定 *je n'avais pas travaillé* は大過去の容認度が高く、複合過去の容認度は下がる。肯定はこの逆である。この容認度の差からは、大過去、複合過去の適合性には、否定および逆接が大きく関係しているように思われるが、南館・石野の説はこの点を考慮に入れることができず、正しい予測ができない。意図性の有無は、我々の問題を解決するのに有効な概念ではないということになる。

9) *J'ai réussi parce que {j'ai travaillé. / ? j'avais travaillé.}*

「{よく勉強したから/よく勉強していたから}、合格した。」

10) *J'ai réussi pourtant {je n'avais pas travaillé. / ? je n'ai pas travaillé.}*

「{よく勉強していなかったにもかかわらず/よく勉強しなかったにもかかわらず}、合格した。」

## 2.2 東郷 (2020)

東郷 (2020) は、「大過去形は過去の時点でいったん立ち止まり、過去方向を振り返って、その時点より前に起きた出来事や、その時点に残っている結果状態を述べる時に用いる」としている。東郷 (2020) では Declerck (1991, 1994) の提唱する中心場面という概念を用い、大過去は中心場面を設定して語りの時間を進めることはなく、中心場面に従属して先行性を表すとする。

大過去に時間を進める力がないとすると、次のような、時間に逆行しているように見える例を説明することができる。

11) *L'article relatait comment Mme Dacre, l'épouse du capitaine Denis Dacre, s'était malheureusement noyée dans la crique de Landeer, un peu plus loin sur la côte. Son mari et elle s'étaient installés là à l'hôtel et avaient manifesté l'intention de se baigner, mais un vent froid s'était levé. Le capitaine Dacre avait estimé qu'il faisait trop froid pour lui et il s'était rendu(3), en compagnie de quelques autres personnes de l'hôtel, sur le terrain de golf voisin. Cependant, Mrs Dacre avait déclaré(1) qu'il ne faisait pas trop froid pour elle et elle était partie(2) seule vers la crique. [...]*

記事はデニス・デークル大尉夫人がラトゥールから少し離れたランディア入り江で不幸にも溺死したと報じていたわ。夫と彼女はそこのホテルに宿をとって、海水浴に出かけようとしているところだったんだけど、冷たい風が吹き始めていた。デークル大尉は寒すぎると思って、友達と一緒に近くのゴルフ場に行った(3)のんだけど、デークル夫人は寒すぎはしないと言って(1)、一人で入り江に向かった(2)。」

デーケル大尉の証言をもとに書かれた新聞記事で、大尉は夫人が入り江に行ったのを見送っているので、事態の客観的な生起順序は「言って」(1)「入り江に向かい」(2)「夫がゴルフに行った」(3)の順番になる。大過去が中心場面との以外の時間関係を表すことがないとすると、複数の大過去間の出現純が、現実の事態の時間関係を踏襲していないこととも矛盾しない。

だが、東郷(2020)では、本稿の問題である「なぜ大過去は否定、逆接と親和性がよいのか」ということがどのように説明されるのか、明らかではない。なぜ例3では大過去が奇妙に響き、例4では反対に大過去は容認され、複合過去だと奇妙に響くのか。「過去の時点 $t_1$ から振り返って以前のことを述べる」という点では、例3、4は同様に見える。我々の問題は未解決のままである。

### 3. 大過去は未完了相である

ディスクールの大過去であっても、*récit*に現れる大過去とまったく違う性質を持つとは考え難い。同じ性質が、ディスクールの文脈に置かれた場合に文脈の要因と反応し、特有の振る舞いを見せるようになると思うほうが妥当であろう。ではその大過去の形態固有の性質とはどのようなものか。

本稿では、大過去には「出来事文ではない」、および「2つの異なる時点を考慮に入れ、互いに関係づけながら述べる」という性質があると主張する。そしてこれらが、上に挙げた否定、逆接との親和性を生み出すものであると考える。

まず、一つ目の主張にある「出来事文」とはどのようなものを指しているのかを、明確にしておく必要があるだろう。本稿で出来事文と呼ぶものは、次の2つの性質を併せ持つものである。

1) 完了相である(点過去)

2) 事態の知覚を表す(知覚可能な事象を表す=生起時点に視点を置くことができる)

大過去はこのいずれの性質も持たない。未完了相であり、事態の知覚ではなく、知識として事態の存在を表す文であると考えられる。では未完了相であるという点から見ていこう。

## 3. 1 大過去は時間を進めない（時間限定されていない）

完了相（=点過去）であれば、その連続が語りの時間を進める。単純過去、複合過去の場合である。これらの時制に置かれた事態は、その生起時点に限定されている。個々の事態の時間が限定されているため、複数の事態が単純過去あるいは複合過去で述べられると、述べられた順に次々に起きたと解釈される。これに対し、事態の始めと終わりを表さず、事態をその内側から述べる未完了相では、事態は次々起こるとは解釈されず、時間は進まない。同じ時点に起きている最中の複数の事態を述べていると解釈される。

次の例では、単純過去が連続して出現するが、出現の順番は事態の生起順であると解釈される。

- 12) Or un matin, sur le chemin de l'école, il aperçut, accroché à un bec de gaz, un beau ballon rouge. Pascal posa sa serviette par terre, monta au réverbère, décrocha le ballon et courut avec lui jusqu'à sa station d'autobus. (Lamorisse *Le ballon rouge*)

だがある朝、学校からの帰り道、彼はガス栓に、綺麗な赤い風船が引っ掛かっているのに気づいた。パスカルは地面にカバンを置いて、街灯に上り、風船を外して、バス停まで風船と一緒に走った。（日本語訳は筆者による）

図 1



e<sub>1</sub> : il aperçut  
 e<sub>2</sub> : Pascal posa  
 e<sub>3</sub> : monta

これに対し、大過去が連続して出現する場合は、語りの時間は進まない。次の例では、大過去は、半過去と同様、カミーユの遺体の状態を述べる役割を果たしている。下線部のどの事態も、カミーユの遺体が寝かされているモルグの様子を描写しており、上の例に見られたe<sub>1</sub>→e<sub>2</sub>→e<sub>3</sub>→…のような、次々に起こる事態を表すことはない。半過去に置かれた事態（見ていたregardait、ひどい姿だったétait ignoble、崩れずこわばっていた était ferme et rigide）も、大過去に置かれた事態（目鼻立ちが保たれていた）も、同じ時間t<sub>1</sub>の状況を表すものであり、これは文を入れ替えても、談話全体が伝達する意味は変わらないことから見て取れる。

- 13) [...]en face de lui, sur une dalle, Camille le regardait[...] Camille était ignoble. Il avait séjourné(1) quinze jours dans l'eau. Sa face était encore ferme et rigide;

les traits s'étaient conservés(2), la peau avait seulement pris(3) une teinte jaunâtre et boueuse.

真正面の床石の上で、カミーユが彼を見ていた。カミーユはひどい姿だった。二週間水に浸かっていたのだ(1)。顔はまだ崩れずこわばっていて、目鼻立ちはもとのままに保たれていた(2)。肌はただ黄ばんだ泥っぽさを帯びているだけだった(3)。

- 14) [...]en face de lui, sur une dalle, Camille le regargait[...] Camille était ignoble. Il avait séjourné(1) quinze jours dans l'eau. Sa face était encore ferme et rigide; la peau avait seulement pris(3) une teinte jaunâtre et boueuse, les traits s'étaient conservés(2).

真正面の床石の上で、カミーユが彼を見ていた。カミーユはひどい姿だった。二週間水に浸かっていたのだ(1)。顔はまだ崩れずこわばっていて、肌はただ黄ばんだ泥っぽさを帯びているだけだった(3)。目鼻立ちはもとのままに保たれていた(2)。

大過去は、語りの時間を進めず、互いに重なりあう。大過去はこの点で単純過去、および複合過去と異なる。

### 3.2 渡邊 (2018) 「先行性」

だが、渡邊 (2018) では、次の大過去の連続の例を挙げ、大過去も「物語の前景」を表すことがあるとする。大過去が出来事を表しているということになる。たしかに、次の例では、一見、大過去によって語りの時間が進んでいるように見える。

- 15) Évidemment, j'avais posé des questions aux pêcheurs, à tous ceux qui avaient été témoins de l'accident. Une femme m'avait raconté une histoire bizarre à laquelle je n'avais pas prêté attention sur le coup, mais qui me revint plus tard. Elle prétendait qu'au moment où elle avait hélé son amie, Mlle Durant n'était pas en difficulté. D'après elle, l'autre l'aurait rejointe et lui aurait délibérément maintenu la tête sous l'eau. Comme je vous l'ai dit, je n'avais pas fait très attention à cette histoire. C'était si extravagant et, vues de la plage, les choses peuvent paraître si différentes ! Mlle Barton avait peut-être tenté de faire perdre conscience à son amie en voyant que celle-ci allait les faire couler toutes les deux dans son affolement.

「もちろん私は漁師たちに質問しましたよ。事故を見ていた人みんなにね。一人の女が妙な話をしていて、私はその時はそんなに気にも留めていなかったのですが、後になってふと思い出したのです。彼女が言うには、大声をあげて友

達を呼んだ時にはミス・デュラントはまだどうもしていなかったというのです。彼女によれば、もう一人の女性がそばに来てわざとミス・デュラントの頭を水の中に沈めたのだというのですよ。言ったように、この話にはあまり注意しませんでした。あまりにとんでもないし、海岸から見たら、物事は違ったように見えるものですから。ミス・バートンはもしかしたら友人を失神させようとしていたのかもしれませんが。こんなに死に物狂いだと二人とも溺れてしまうと考える。

また、Barcelo et Bres (2006) でフラッシュバック analepse とされている次の例も、渡邊は「事態の生起そのものに注目する」もので「全体的アスペクト（筆者注：点的アスペクト、完了アスペクトと同義）に擬似的に近づく」としている。大過去はこの例では出来事を表しているというわけである。

16) Jaques *regarda* sa montre, *vit* qu'il était quatre heures déjà ; et, il se *hâta* de retourner à l'impasse d'Amsterdam.

Jusqu'à midi, Sévrine avait dormi profondément. Ensuite, réveillée, surprise de ne pas le voir là encore, elle avait rallumé le poêle ; et, vêtue enfin, mourant d'inanition, elle s'était décidée, vers deux heures, à descendre manger dans un restaurant du voisinage.

ジャックは時計を見てもう4時だと気づき、アムステルダム街に急いで戻った。正午までセヴリーヌはぐっすり眠っていて、それから、起きてジャックがまだ戻っていないのに驚いた。ストーブに火を入れ、ようやく着替えて、耐えきれないほどお腹がすいたので2時頃に近所の食堂に食べに行こうと決めた。

しかし、これらの例では、大過去が時間的前後関係の通りに並んでいるだけなのであって、大過去の形態自体が時間を進めているのではない。次の例では、同様に大過去が連続して出現するが、(6)と(7)は、時間的前後関係に逆行している。デークル大尉がゴルフ場に行った(6)のは、デークル夫人が寒すぎはしないと言った(7)後でなくてはならない。

17) Écoutez la suite. Je la découvris deux jours après, dans les journaux sous le titre de *Baignade fatale*. L'article relatait comment Mme Dacre, l'épouse du capitaine Denis Dacre, s'était malheureusement noyée dans la crique de Landeer, un peu plus loin sur la côte. Son mari et elle s'étaient installés là à l'hôtel et avaient manifesté l'intention de se baigner, mais un vent froid s'était levé. Le capitaine Dacre avait estimé qu'il faisait trop froid pour lui et il s'était rendu, en compagnie de quelques autres personnes de l'hôtel, sur le

terrain de golf voisin. Cependant, Mrs Dacre avait déclaré qu'il ne faisait pas trop froid pour elle et elle était partie seule vers la crique. [...]

「続きを聞いてよ。二日後の新聞に『死の海水浴』という見出しで出ているのを見つけたのよ。記事はデニス・デークル大尉夫人がラトゥールから少し離れたランディア入り江で不幸にも溺死した(1)と報じていたわ。夫と彼女はそこのホテルに宿をとって(2)、海水浴に出かけようとしているところだった(3)んだけど、冷たい風が吹き始めていた(4)。デークル大尉は寒すぎると思ってた(5)、友達と一緒に近くのゴルフ場に行っただけ(6)のだけど、デークル夫人は寒すぎはしないと言ってた(7)、一人で入り江に向かった(8)。』

この例に見られるように、大過去の連続は必ずしも時間の流れに従わない。上記の例には大過去の文が多数表れるが、これらは事態を並列して述べているだけなのである。互いの時間的前後関係は問題にされない。他に適当な順序がない場合、事態の生起順になることが多いが、話者が思い出した順に述べることや、上記例17の後半のように関与者ごとにまとめて述べることも可能である。大過去の連続は語りの時間を進めない。大過去は未完了相である。

### 3.3 時間限定がない=時間軸上に定位しないDucrot (1979) *Thème temporel*

上記の観察から、大過去は、単純過去や複合過去のように時間軸上に事態を定位する形態ではないということが明らかになる。だが、上記の例16、17中で大過去に置かれた動詞は、語彙の意味が点的な事象を表すものが圧倒的に多い。(dormir, rallumer, décider, se noyer, s'installer, déclarer …) 点的な事象は通常、完了解釈され易いが、大過去が事態を時間軸上に定位しないのだとすると、これらは事態をどのように表していると考えればよいのか。

Ducrot (1979) では、一回的な事態が、属性*propriété*として捉えなおされることがあると指摘されている。Ducrotは、Benveniste (1948) が「*menteur*「嘘つき」、*voleur*「盗人」のように、一度きりの、あるいは繰り返された動作・行為 (*mentir, voler*) が、その行為者の属性として表される」としていることを引いている。そして、このように出来事*événement*を性質*qualité*に変化させる機能が、直説法半過去に備わっているとす。Ducrotは、時間的要素が時間的テーマ*thème temporel*になることで、それについて述べられたことが、その時間の属性を表すものとなるとする。複合過去が一回的な出来事を述べるのに対し、半過去は*propos temporel*として、*thème temporel*である時間を性格付けし、属性を述べる。次の例では、*l'année dernière*「去年」は時間的テーマになっており、半過去に置かれた「引越した」という事態が、去年という年を特徴づけるものとして述べられている。

## 18) L'année dernière, je déménageais.

「去年は、引っ越しをしましてね」

「去年」がテーマとなって、その下に置かれることで、一回的な出来事であっても、その出来事の生起する時間に限定されず、去年全体の特徴として解釈される。未完了相の、半過去で述べられていることが重要である。完了相の複合過去もしくは単純過去に置かれた場合、事態「引っ越した」は引っ越しの当日にのみ真となり、「去年」全体に対して有効な属性とはならない。

Ducrot (1979) が取り上げたのは半過去に関してであるが、同様のことが、大過去にも起こっていると考えることができる。次の例では、「引っ越して、もういなかった」という状態が、引っ越しがされた一時点だけではなく、平穏だった去年全体に関して有効な属性として解釈される。

## 19) L'année dernière, on était tranquille. Ils avaient déjà déménagé.

「去年は、僕らは平穏だった。彼らは既に引っ越していた」

上記の例17では、「新聞記事になった溺死事件」が、例16では「セヴリーヌがジャックと離れている間にしたこと」がそれぞれテーマとして働く。大過去に置かれた事態はいずれも、溺死事件を特徴づけ、推理の手掛かりとなるものであり、また、セヴリーヌが過ごした午後全体を、主人公ジャックの悪夢と対照的な、平凡なものとして特徴づけるものである。

大過去は未完了相である。同じく未完了相の半過去と同様、大過去にも、主題の下に置くことで、事態をその期間全体に有効な属性として表す機能があると言える。

## 4. 大過去は2つの異なる時点を考慮に入れ、互いに関係づけながら述べる

## 4.1 大過去は知覚可能な事態を表さない。(視点が置けない)

互いに重なりあって時間を進めない、*thème temporel*を特徴づけることができるという点では、大過去は半過去と共通する。しかし大過去は、半過去と以下の点で異なる振る舞いを見せる。

- 1) 事態の生起時点 ( $t_2$ ) に知覚主体を想定できない。したがって知覚を表さない。

2) 常に基準時 $t_1$ を考慮に入れて ( $t_1$ との関係において) 事態を述べる。

大過去は、「過去の過去」であるとされる。 $t_1$ は、複合過去、単純過去で示されることの多い、大過去の基準点とされる時点で、「一段目の過去」(渡邊2018)である。下の例では、「ローラが胸を突かれた」*reçut un coup violent* 時点である。

20) Le lendemain, comme il (=Laurent) entra à la Morgue, *il reçut ( $t_1$ ) un coup violent* dans la poitrine : en face de lui, sur une dalle, Camille le regardait[...] Camille était ignoble. Il avait séjourné quinze jours dans l'eau. Sa face était encore ferme et rigide; les traits s'étaient conservés, la peau avait seulement pris une teinte jaunâtre et boueuse.

翌日、モルグ(死体置き場)に入ると、彼はいきなり胸に激しい一撃をくらった。真正面の床石の上で、カミーユが彼を見ていた。カミーユはひどい姿だった。二週間水に浸かっていたのだ。顔はまだ崩れずこわばっていて、目鼻立ちはもとのままに保たれていた。肌はただ黄ばんだ泥っぽさを帯びているだけだった。

下線部の半過去と同じく、大過去も時点 $t_1$ での状態を表す。だが、 $t_1$ において、半過去の表す事態(状態)と同様に観察されるのは、大過去が表す事態 $t_2$ が起きた結果生じ、 $t_1$ の時点まで残存する状態である。基準点 $t_1$ の時点では、事態 $t_2$ の生起が知覚されることは決してない。

半過去の時点には視点を置くことができる。半過去は進行中の事態*regardait*「見ていた」、*était ignoble*「ひどかった」、*était ferme et rigide*「こわばっていて崩れていなかった」をその場で見ている主体(知覚主体)を想定することができる。だが、これに対し、大過去の事態はその生起時点に知覚主体を想定することはできない。*séjourner dans l'eau*「水に浸かる」のは、カミーユが死体置き場に運ばれてくる以前に終わっていて、もはや水には浸かっていない。目鼻立ちも、黄色くなった肌も、この文脈で描き出された時点 $t_1$ で目撃可能とされるのは、行為*se conserver*、*prendre une teinte jaunâtre*の結果であって、水の中で保つ、黄ばむという行為そのものを書いているのではない。

この知覚不可能性は、大過去が2時点を考慮に入れて述べるものであることから来る。大過去は過去( $t_1$ )の過去( $t_2$ )とされるが、これは単に時間的な先行を意味するものではない。どんなに以前に起きた事態であっても、現在時との関係で語られる場合、あるいはどの時点とも関係づけられずただ過去の出来事として語られる場合には、複合過去、または単純過去が用いられる。この

時制の時点には、視点を置くことができる。例21では、半過去regardait「見ていた」は視点を置いて内側から事態を述べているが、この視点は単純過去reçutの時点 $t_1$ に置かれている。

21) *Il reçut* ( $t_1$ ) un coup violent dans la poitrine. Camille le regardait.  
彼は胸を突かれた。カミーユが彼を見ていた。

だが、大過去の形態は、事態が終わった後の時点を経験時として定めており、事態の生起時に視点を置くことを許さない。大過去は、形態が表す事態の生起時 $t_2$ と、基準時 $t_1$ の2時点を経験時と見做し、事態を経験時と関連付けて解釈することを要求するものである。上の例では、基準時 $t_1$ の時点で、「15日間水につかっていた( $t_2$ )、その結果の遺体の状態」を述べるもので、話者は $t_1$ の時点で擬似的に身を置いて述べている。大過去に置かれた事態は常に $t_1$ に関係づけられるが、どのような知覚主体も2時点を同時に見ることはできない。基準時 $t_1$ の時点にいる知覚主体に、 $t_2$ に生起する事態を見ることはできない。したがって、大過去で事態を述べる時、話者（語り手）は、「見る人（知覚主体）」ではなく、その事態が過去に起こったことを「知っている人」でなければならないということになる。

#### 4.2 知覚／知識

文が表す情報を得る範囲が、知覚できる「その場」の範囲、つまり知覚可能な一時空の範囲を超えてしまうと、文は知覚を表したものと解釈されなくなる<sup>2</sup>。このような場合、文は知識を表すものとなる。

3.2節で確認した、Ducrot (1979) の「属性」propriétéは知識を表すものである。ある一時点だけで得られる情報は、知覚による情報に限られる。また知覚できるのも一時空でのみで、局所的一時空を離れては知覚することはできない。一時空での知覚から得られる以上の情報を伝達する文の話者は、必ず複数の時空を視野に収め、その差を捨象して考慮していることになる。

22) Paul fume. (Paul est fumeur.)  
ポールは煙草を吸う (ポールは喫煙者だ)

上記のように言うとき、話者は、ポールがタバコを吸う一回的な体験ではなく、個々の喫煙体験の集合を述べたいのであり、またその集合がポールを特徴づける属性の一つであると述べている。この時、個々の体験の差は捨象され、どの一回の喫煙のことも述べられてはいない。

2つの時空で起きた事態を関係づけるのも、一時空で得られる情報のみではできない。知覚の範囲を超えた、知的加工であり、このような過程を経た情報は知識である。大過去は $t_2$ での事態を $t_1$ と関連付け、知識として表すものだと言える。

#### 4.3 冒頭の大過去（大過去は $t_1$ を前提とする）

$t_1$ を前提としているため、大過去が出現しても $t_1$ が示されていない場合、受け手（読者）は $t_1$ を期待する。大過去の伝達する情報は、二次的な背景知識であり、物語の後景に属するものである。二次的情報には対する一次的情報が存在し、後景には対する前景が必ず存在するのだが、大過去は自らが二次的な情報を表す形であることで、一次的情報が存在することも同時に示している。大過去の一文には表れないが、文脈に必ず存在し、視点の置き場所となる $t_1$ を鑑みて、大過去は解釈されることになる。

下の例は物語の冒頭であるが、「本当にお話が始まった」という感じを受けるのは、2段落目の「ある朝、気づいた」と言う単純過去で、それまでの文は背景状況d corを描き出している。この部分は、「このような状況の下に以下の事件 $t_1$ は起こった」ということを伝達するためのものである。

23) Il y avait une fois un petit garçon du nom de Pascal. Il n'avait ni fr re ni s ur et il  tait triste d' tre seul   la maison. Un jour il *avait ramen * un chat perdu et aussi, plus tard, un jeune chien abandonn . Mais sa maman trouvait que ces b tes salissaient trop. Et Pascal se retrouvait toujours seul sur les parquets bien cir s de l'appartement de sa maman. Or un matin, sur le chemin de l' cole, il aper ut, accroch    un bec de gaz, un beau ballon rouge. Pascal posa sa serviette par terre, monta au r verb re, d crocha le ballon et courut avec lui jusqu'  sa station d'autobus.

昔あるところに、パスカルという男の子がいました。彼には兄弟も姉妹もいなくて、家でたった独りぼっちでした。あるときは迷い猫を、またあるときは捨て犬を拾ってきましたが、お母さんは動物は家を汚すと嫌がりました。パスカルはお母さんの綺麗に手入れされたアパルトマンに独りぼっちのままでした。でもある朝、学校からの帰り道、彼はガス栓に、綺麗な赤い風船が引っ掛かっているのに気づきました。パスカルは地面にカバンを置いて、街灯に上り、風船を外して、バス停まで風船と一緒に走りました。

上の例の大過去を複合過去、または単純過去で置き換えると、そのような効果はなくなり、「迷い猫を拾ってきた」という出来事からお話の本筋が始まることになる。上の例にあった「あ

る朝、風船に気づく」という、物語が進行し始めるきっかけの特権的な事態の出来はもはや期待されない。大過去が使われることによって、そこにまだ明示されていない時点、すなわち状況 $t_1$ が、存在すると感じられるようになる。

24) Il y avait une fois un petit garçon du nom de Pascal. Il n'avait ni frère ni sœur et il était triste d'être seul à la maison. Un jour il a ramené un chat perdu.

大過去が用いられる文脈では、話者（語り手）－聞き手（読者）の間で、 $t_1$ が高度に共有されている。これは大過去の機能によるものである。

## 5. ディスクールの大過去と逆接、否定との親和性

大過去は常に $t_1$ を考慮に入れ、 $t_1$ との関係において事態 $t_2$ を述べる。したがって $t_1$ に関係があると捉えられない事態は、 $t_1$ に時間的に先行していたとしても大過去を用いることはできない。

25) { Je suis venu / ? J'étais venu } à Paris et j'ai raté mon examen.

無関係な2つの事態を表す場合は複合過去、または単純過去が用いられる。だが、2つの関係を述べるものであると、大過去が用いられる。

26) J'avais travaillé pourtant j'ai raté mon examen.

27) Je n'avais pas travaillé pourtant j'ai réussi.

しかし、このことだけでは、下の順接の例の容認度の低さを説明できない。試験の合否と勉強したかどうかは、通常関係があると捉えられるものである。

28) J'ai réussi parce que { j'ai travaillé. / ? j'avais travaillé. }

勉強 {したから / していたから} 試験に受かった。

ここでは、大過去を用いて関連付ける必要性の有無を考えなくてはならないだろう。大過去は

$t_1$ の高度な共有を要求する、いわば強い形である。「試験勉強をして試験に受かった」あるいは「試験勉強しなかったので落ちた」という順当な展開なのであれば、並列するだけでも聞き手の計算によって解釈可能である。大過去のような、強く結びつける形を使う必要はないのである。

これまでの考察で、冒頭の例3-5の大過去を説明することができる。3-5はいずれも2つの事態の組み合わせが、「不勉強-合格」「勤勉-不合格」と順当な流れに沿ったものではない。「予約-キャンセル」の関係も同様である。論理argumentの方向を変えなくてはいけないので、解釈時にその分負荷がかかる。そのため、形態によって $t_1$ との結びつきを保証されている大過去で「 $t_1$ の状況は、この $t_2$ の事態が起きた結果の残存の中にある」ということ、「 $t_1$ は $t_2$ と関連があって起きたことである」ということを述べる必要がある。結びつきが容易に推測できない場合であっても、大過去の機能によって、2つの事態を関係づけて解釈させることが可能になる。

これらはまた、2つの事態の結びつき全体で、より高位に置かれ2つを包括するテーマに何らかの特徴づけをなしているという点で共通している。

29) J'ai réussi ( $t_1$ ) pourtant je n'avais pas bien travaillé ( $t_2$ ).

「受かった( $t_1$ )が、それは勉強しなかった( $t_2$ )という状況においてのことなのだ」という関連付けによって、「それほど簡単な試験だった」という試験の特徴づけ、あるいは「運が良いのだ」、「勉強しなくても受かる実力の持ち主なのだ」など、jeの特徴づけがなされることになる。

語りrécitでは、すべてが言語的に構築される。 $t_1$ の状況も例外ではない。その意味では、語りの文脈で $t_1$ を構成するもの、 $t_1$ の背景知識となるものはすべて $t_1$ に結びつけられる必要のあるものであり、 $t_1$ を強く志向する大過去で述べられることになる。

ディスカールの大過去に「のに」の意味が出てくる理由は、次のように説明できる。

30) Je t'avais bien dit !

「だから言ったのに！」

31) Tu m'avais promis...

「約束したのに…」

ディスカールでは言語化されていなくても、 $t_1$ は高度に共有されている。話者と聞き手は $t_1$ を念頭に置いて話している。大過去は $t_1$ を時間的テーマとしており、 $t_1$ の存在を前提として出現し、事態 $t_2$ の、 $t_1$ での残存状態を述べる。だが、ディスカールの文脈では、 $t_1$ の他に、話者と聞き手が

高度に共有する時点として発話現在時 $t_0$ がある。

$t_1$ まではあった $t_2$ の残存状態と、 $t_0$ の状態が違う場合、 $t_1$ は転換点として認識される。 $t_1$ までは $t_2$ の残存状態が存続しているが、 $t_1$ 以降、もうその状態は続かない。大過去が使用されるときには常に $t_1$ は話者-聞き手間で共有され「重大な時点」として認識されているが、上の場合には、発話現在 $t_0$ から見た「転換点」として認識され、 $t_1$ の前後で対比が生じることになる。「～のに」「～くせに」という意味や、逆接、否定との親和性はこのようにして生じる。

図2



反対に $t_2$ の残存状態が $t_0$ まで続いていると（ $t_2$ の残存が $t_0$ まで有効であると） $t_1$ の重要度はなくなる。わざわざ大過去を使う意味はないため、容認度が下がることになる。

## 6. おわりに

本稿では以下のことを主張した。

- ・大過去は出来事を表さない未完了相である。
- ・大過去は2つの時点を含む主題thèmeの下で属性propriétéを表す。
- ・大過去が使用されるとき、 $t_1$ は高度に共有されている。
- ・談話discoursでは、同じく高度に共有されている発話現在時 $t_0$ の状況と、大過去の表す $t_1$ 以前の状況との対比が生じる。逆接、否定との親和性はここに起因するものである。

## 注

1. 大テーマを設け、その下に置くことで時間的限定が外される例は単純過去でも見られる（Kamp H. & C. Rohrer (1983)）。しかしここではこれ以上立ち入らない。
2. Vogelee et De Mulder (1998) では、*quand* 「～のとき」で結びつけられた2つの現在形は、「今見ている」という解釈と相いれないことが指摘されている。

参考文献

- 岸彩子2018a「フランス語の大過去Ⅰ」山村ひろみ編『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』九州大学
- 岸彩子2018b「大過去と『場』の共有」日本フランス語フランス文学会2018年度関西支部大会（2018年12月1日、於大阪府立大学）発表ハンドアウト
- 金水敏2001「テンスと情報」音声文法研究会（編）：『文法と音声3』くろしお出版 pp. 55-79
- 工藤真由美2013「時間的限定性という観点が提起するもの」影山太郎（編）：『属性記述の世界』くろしお出版 143-176
- デクラーク、レナート 1994『現代英文法総覧』開拓社 第3章 pp. 118-211
- 東郷雄二 2011『中級フランス語 あらわす文法』白水社
- 東郷雄二 2014「半過去を支える解釈領域－視野狭窄の半過去を中心に」『フランス語学研究』48 pp.37-56
- 東郷雄二2018「談話の観点から見たフランス語の時制－大過去を中心に－」平成30年度 関西学院大学大学院 「フランス文献研究1」講義ノート
- 東郷雄二2020 「談話構築から見た大過去形について」日本フランス語学会第332例会 9月26日ハンドアウト
- 南館英孝・石野好一 1994『フランス語を読むために 80のキーポイント』白水社
- 西村牧夫 1985、2001 「現在にかかわる大過去」『フランス語学の諸問題I』三修社 pp. 50-62
- 西村牧夫 2014「事行成立と時制構造」『フランス語学の最前線2』ひつじ書房 pp. 89-135
- 渡邊淳也2014「叙想的時制、叙想的アスペクトと認知モード」春木仁孝、東郷雄二編『フランス語学の最前線2』ひつじ書房 pp. 177-213
- 渡邊淳也2018a「フランス語の大過去Ⅱ」山村ひろみ編『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』九州大学
- 渡邊淳也2018b「フランス語大過去形の特徴的用法について」『筑波大学フランス語フランス文学論集』第33号、pp. 81-112
- Barceló G. J. et J. Bres 2006 Les temps de l'indicatif en français, Ophrys
- Benveniste É. 1948 Noms d'agent et noms d'action en Indo-européen, Adrien-Maisonneuve
- Benveniste É. 1974 Problèmes de linguistique générale II, Gallimard
- Declerck, R. 1991 Tense in English. Its Structure and Use in Discourse, Routledge.

- Ducrot O. 1979 « L'imparfait en Français » Studies in descriptive linguistics, vol. 9 (F.J.Hausmann, ed), pp. 25-44, Julius Groos Verlag, Heidelberg. D'abord publié dans Linguistische Berichte, Wiesbaden, avril 1979, pp. 53-73.
- Kamp H. & C. Rohrer 1983 "Tense in Texts", R. R. Bauerle et al. (eds) Meaning, Use and Interpretation of Language, De Gruyter
- Vogeleer S. 1994 « Le point de vue et les valeurs des temps verbaux », Travaux de Linguistique 29, pp. 39-58
- Vogeleer S. et W. De Mulder 1998, « Quand spécifique et point de vue ». Cahier Chronos 3, pp. 213-233